

親愛なる潜在的外国人の皆様へ

神里雄大

翻訳について

この作品のおける（この文章を含む）すべてのテキストはもともと日本語で書かれたものであり、AI翻訳により上演地の言語に翻訳される。それはこの作品が、非ネイティブの人間がその土地で話される言葉を使おうとする時に起きる誤訳、それに伴う誤解を表現するという内容になっているからである。

コンセプト

この作品は『東アジアのさようならにまつわる妙な人々』というタイトルの、2023年にブラジル・サンパウロ、日本の那覇、長崎の三都市での試演を経て、現タイトルへ変更し、翌2024年2月にペルー、リマで初演を迎えた。

今作には、これまでもわたしのテキストに頻繁に登場してきた「移民」、そして「観光客」をテーマに、十一人の架空の人物が登場する。わたしはペルーで日本人の両親から生まれたため、両国の市民権を所持している。だが、わたしはこれまでの人生のほとんどを日本で過ごし、家庭内も日本語だったため、スペイン語を満足にしゃべることができない。23年に東京のペルー領事館にIDの住所をリマから東京に変更をしに行ったとき、ずっと行っていなかった複数回の大統領選挙の罰金を支払うことになり（ペルーは義務投票制）、わたしは日本で発行されたクレジットカードでそれを支払った。その手続きのすべてを、領事館のペルー人の職員に日本語で説明してもらった。

東京の飲み屋で隣り合った人とよく出身地はどこか？ という話になる。この場合の質問の想定は、日本のどこか、ということだが、わたしはペルー生まれだと答えると、ほとんどの日本人はわたしはペルー人なのかどうか、「血」はどうなのかと聞いてくる。いったいわたしは何人なのか、という問いが自分の経験や他人の口から断続的にやってきて、いつもわたしを迷わせる。

いつからかわたしは、自分はずっと外国人でいたいと思うようになった。外国人であれば細かいことも気にしなくていいし、言葉がしゃべれてもしゃべれなくても構わない、楽じゃないか、と考えるようになった。つまり、その土地に一時的に滞在する観光客のような気楽さ

のことである。自分のアイデンティティの揺らぎ、不確かさは、その気楽さが肯定してくれる。

だが、本当に観光客は気楽で居続けることができるのか？

どんなに観光客で居続けたいと願っても、わたしは日本人であることから逃れられない。我々の先祖は、「アジア」という括りの名の下に各地へ侵攻した歴史を持っている。わたしは、国に捉われたくないという思いから、「東アジア」という地域をタイトルにつけてみたものの、日本人の作家として、その括りが持つ歴史や暴力性、権力性を無視できず、さるわけではなかった。わたしは、物語やテーマに都合の良いように、架空の人物たちの人生を配置し調整できるという権力を有している。そのことは自覚し、受け入れ続けなければならないのである。

人物 *名前のあとの括弧は生年月

G a b r i e l F e r n a n d e z (1 9 9 3 . 9)
ガブリエル・フェルナンデス (1993.9)

サンパウロ市ヴィラ・プルデンテ地区生まれ。七歳のときに両親が離婚。以後、母親と二人暮らし。

母親は痲癩持ちで、しばしば元夫に電話をしては、罵声を飛ばし、父親もそれに応戦し、お互いに罵り合うこともあった。母親の機嫌を取るために、父親の悪口を言う癖があった。そして毎日母親のために料理をした。彼は陽の光が好きだった。排気ガスや宙に舞う埃が雨に打たれ、凜としたの空気に包まれる雨上がりの朝が好きだった。

2019年3月、二十五歳のとき彼は旅に出た。サンパウロからボゴタ、ボゴタからロサンゼルス、ロサンゼルスで十六時間のトランジット、さらにサンフランシスコを経由し、四十八時間ほどかかって台湾に到着した。桃園国際空港に着くまでに、ブルース・リーに憧れていたガブリエルは自らをブルースと名乗ることに決めた（しかし、ブルース・リーは香港人だった）。

台北は天井の低い密室に閉じ込められたような蒸し暑さで、街中には嗅いだことのない匂いが漂っていた——肉やフルーツを古い油で揚げた香りが排気ガスに覆われるような匂い。ブルースは文字を読めず、言葉もわからなかった。彼は英語もわからなかった。そのため、翻訳機を使ってどんな食材が使われているかを調べ、指差し料理を注文した。しかし、出てきた料理は彼が期待していたものとは違っていた。客たちはブルースを物珍しそうに見つめ、男たちが自分のことを鼻で笑っていると確信し、一口も食わずに店を飛び出した。

通りには混雑した屋台が出ていて、それを覗き込んだブルースは、

人間と様々な獣の糞尿と埃の混じった臭いに驚き、鼻をつまんで倒れこんだ。親切的な青年が彼を助け起こし、何かを言った。ブルースはその言葉を理解できなかつたが、どうやら彼はその臭いものが何であるかを説明していたようだ。あるいは、「一口食べて」と言っていたのかもしれない。それは油で揚げた臭豆腐だったが、もちろんブルースは臭豆腐の味も名前も想像できるはずがなかった。青年は買って来た臭豆腐をブルースの鼻の前に差し出し、微笑んだ。ブルースの顔はゆがみ、鼻の穴が開き、その強烈な臭いが直接的に彼を襲い、自分の歯が根本から臭くなり始めたと感じた。そして彼は逃げた。

汗をかきながら台北の街を走り、ブルースはあの忌まわしい臭いと経験を何度も反芻した。やがて彼は、自分の脇の下の匂いを何度も嗅いだり、その日の体臭が集中するズボンの一番きわどい部分に思わず鼻をこすりつけてしまうような、自分の意志とはまるで別物の欲望が芽生えていることに気づいた。臭豆腐の強力な引力が彼の鼻と心臓をわしづかみにした。そして、臭豆腐の屋台を見つけては、やや近づき、臭いに気づいて逃げ出す、という何を何度か行なった。

彼が泊まったゲストハウスには、ホセというスペイン人がいた。ホセはブルースが台北で唯一まともに会話できた相手だった。ホセもブルース同様、北京語も台湾語も話せなかつたが、観光客としての振る舞いはブルースをはるかに凌駕していた。言葉が通じなくてもなぜか通用するジョークと愛嬌が彼の立ち居振る舞いに品格を与え、歴史や政治に関する知識や敬意を払った礼儀正しさは、ブルースを感心させるには十分すぎるほどだった。台北の前にホセはベトナムにいて、次は韓国のソウルに行く予定だと言った。ブルースがホセの食事代をいつも払うようになった翌朝、つまりブルースが台北に着いて三日目の朝、目を覚ますとホセの姿はなくなっていた。そして、ブルースは自分のお金がまったく消えていることに気づいた。

アジアへの旅はあっさりと終わり、一週間も経たないうちにサンパウロの自宅に戻ると、母親から元夫が亡くなったことを聞かされた。彼女の表情は嬉しそうでもあり、悲しそうでもあった。

彼女は最近、石膏作りを始めた。今はブルースの父親の右手を作っている。彼を偲びながら、少しずつ体のパーツを作って完成させるのだという。玄関に飾りたいそうだ。母親は息子の旅に興味はなく、質問もしてこない。真っ白なワンピースを着て、夫か幽霊に何かつぶやいている。

帰国以来、ブルースは太陽の光に別れを告げ、部屋にこもった。日が沈むと部屋から出てきて、無言のまま車を走らせ、街に出る。そし

て母親が寝静まると家に戻り、一晩中キッチンで、どこからか集めてきた材料をもとに、あの臭豆腐を再現しようとしている。彼にはそれが豆腐であることすらわかるはずもないが、いつかあの匂いを再現して夜の街で売り、サンパウロの街の匂いを変える革命を起こしたいと考えている。彼はその店に『夜のブルース、ガブリエルの店』というダサイ名前をつけるつもりだ。

そうしてもう数年も、その間、サンパウロの通りが閉鎖されようが解除されようが、彼は一度も日の光を見ることなく、部屋にこもって寝るかシャドーボクシングをし、汗をかきながら神経質に夜中に台所を歩き来し、臭豆腐の再現に人生を傾けている。なお、母のギプスはまだ完成していない。

Komatsu Laura
小松ラウラ (1993.2)

リオデジャネイロ生まれ。日系ブラジル人。父方の祖父母が日本の高知県出身。ラウラは二十四歳のとき日本に向かった。父親の知り合いのクドウ氏に紹介された工場で働くことになった。仕事は、週六日・一日十時間、ベルトコンベアに流れるお菓子にフルーツを載せることだった。職場にはラウラのほかにも出稼ぎの日系人が南米から多く来ていたために、会話には困らなかった。ラウラの同世代で、パラグアイのエンカルナシオン出身の、ケイコという女性と仲良くなった。ケイコの父親は日系パラグアイ人で母親は日本生まれ、三つ下に弟がいた。ケイコの日本語は完璧だった。彼女は言語に大きな興味を持っており、スペイン語・日本語はもちろんのこと、ポルトガル語も英語もできた。以前ブラジルはアラサトゥバ出身の日系ブラジル人と付き合い合っていたこともあるらしかった。ケイコはひとあたりがよく、現場を統括する西村部長とも仲がよかった。ラウラは他の多くの日系人と同じように、日本語をまったくと言っていいほどしゃべることはできなかつたが、それでもケイコの通訳のおかげで、西村部長はラウラたちにもやさしかった。ラウラはいつまでも経っても日本語が話せるようにならなかつたが、同僚たちとはポルトガル語、あるいはスペイン語とポルトガル語を混ぜながらいつまでも話すことができた。

日本に来て一年半が経ったある休みの日に、ラウラはケイコと大阪へ遊びに行った。そして、この日がケイコと会った最後に日になった。

ラウラとケイコにとってこの日は初めての大阪だった。高層ビルが立ち並び、無数の電車が駅を忙しく通り過ぎていく。信じられないほど多くの行き交う人たち。ふたりは感嘆の声を上げ、手をおおげさに叩いて笑った。平和な笑いだった。彼女たちは地下鉄に乗り、道頓堀

を歩き、たこ焼きを食べ、いま一番人気というアイスクリーム屋に並んでいたとき、タケとテツというふたりの男たちに声をかけられた。テツはひと目でケイコを気に入ったのだという。彼らは長崎から大阪に旅行に来ていた。彼らとケイコは大いに盛り上がった。日本語で、タケは時折ラウラの足元から胸元あたりまでを舐め回すように見てきたが、声はかけてこなかった。自分たちの番がやってきて、アイスクリームを注文ができなかったラウラは、テツとの会話に夢中になっているケイコに協力を求めたが、そのときの、ケイコの顔にあからさまな面倒くささの色が浮かんだのを、ラウラは見逃さなかった。

小さな公園でアイスクリームを食べた。ケイコによると、テツは写真家で、車で日本各地を回りながら、街角や出会った人の写真を撮っている。タケは会社員で大阪には出張で来ていて、明日長崎に帰る。ケイコが笑っていたのは、タケの泊まっているホテルに四体の巨大顔面柱があるということだった。ホテル正面の四本の大きな柱に、顔と脚だけの不気味な像が彫られていて、四体はそれぞれ別の人種なんだとケイコはラウラに説明した。それを見にケイコは彼らと行くと行ったが、ラウラも一緒に行こうとは言わなかった。ラウラは「別の買い物をしたいからわたしはいいや」と言った。ケイコはさっさと男たちふたりと一緒に行ってしまった。ラウラはしばらく立ち尽くし、けれど人の流れに背中を押されるように、彼らの跡をつけた。

三人はずっと昔から知り合いかのようにも見えた。日本語特有の甲高い笑い声、上目遣いの応酬、不必要に多い相槌と同じ単語の繰り返し。息がピツタリあっていた。ケイコがひとときわ高い声を出したと思うと、もう例のホテルに着いていた。ホテルの前で、テツは自分の自慢のカメラでケイコの写真を撮り始めた。ケイコも思い思いにポーズをとった。ホテルには、たしかにケイコが言っていたとおり、不気味な頭と脚だけの像がいて、頭上から支柱がまっすぐ伸びていた。ケイコは汗だくになりながらポーズをとり、テツはさまざま角度からシャッターを切り、それをタケが微笑を浮かべ見ている。やがて、三人はホテルの中に入っていった。三人が消えてから、ラウラは支柱の像を数枚写真に撮り、ひとりで帰宅した。

ケイコは翌日から仕事に來なくなつた。数日後にケイコから來たメッセージによると、彼女はテツの車に乗り、彼の写真を手伝っているのだという。いまは鹿児島に着き、これからフェリーで沖縄へ向かうのだそうだ。ケイコが言うには、彼女の、多言語環境におけるボキャブラリーバランスについての考察、翻訳の不可能性、オノマトペと文化論などについて、ここまで理解してくれるのは彼の他にいなかった

ということだ。工場では、ケイコの無断欠勤によって、現場の従業員と管理職との会話が成り立たなくなり、混乱が生じた。その一週間後、沖繩の那覇で首里城が火事になったが、ローラにはそのことを知る由もなかった。

それからすぐにパンデミックがやってきて、ラウラはまだ同じ仕事をしている。あれから大阪には一度も行っていないし、祖父母の故郷である高知県にも行ったことはない。日本語もあいかわらずしゃべれないが、日本語のわかるポリビア人が来てくれたおかげで西村部長はマスク越しに笑いかけてくる。先日、リオデジャネイロで経営していた日本料理屋が閉店することになった、と両親から連絡が来たが、まだ帰ろうとは考えていない。

不明(仮名・フアンジ)^{F o u n j i}

男性、年齢不詳、出身地はその顔つきから東アジアのどこかと推測される。便宜上、彼の名前を「フアンジ」とする。

フアンジは長らく働いていた会社を辞め、世界一周の旅に出た。最初に彼が目撃されたのは、メキシコシティ国際空港だった。その後二週間ほどメキシコシティやオアハカにいたが、スペイン語を勉強するべきだと考え、グアテマラはアンティグアのスペイン語学校に、ホームステイをしながら通うことにした。ステイ先はスペイン語学校から自動的にあてがわれた。ホームステイはフアンジが期待していたものとは違っていた。個室・朝食昼食付きだったが、家族との交流は皆無だった。彼が朝ダイニングに行くとすでにテーブルに朝食が置いてあり、授業が終わって昼食に戻っても同様だった。その家には他にも外国人が四人滞在しており、皆ヨーロッパ人で、すでにかなりスペイン語を話していた。フアンジは英語がある程度はできたが、彼らとはしゃべらなかつた。ヨーロッパ人たちもやがてフアンジに話しかけるのをやめた。毎日が暮れ始めると雨が降り、その雨音を聞きながらフアンジはベッドに横になった。そして雨が止むタイミングで夕飯を食べに行くために外に出かけた。

ある日、フアンジはいつも行くモヒートの安い店で、二人組に話しかけられた。「ワインボトルを頼みたいんだけど、赤にするか白にするか意見が割れて、じゃあどっちも頼もうとなったんだけど、二人では飲みきれないから一緒にどう？」と、そのカップルは言った。声をかけてきたのはフランス人女性とフランス在住のメキシコ人男性で、メキシコから南米を目指して車で旅をしているんだとうれしそうに言った。車で寝泊まりし、たまにホテルにも泊まり、そうやって期間を

決めずにふたりの思い出を作るんだと幸せそうだった。三人はテラスで乾杯した。カップルは上機嫌にお互いのグラスを何度も交換し、ことあるごとにキスをしていたが、ファンジはアルコールの力を借りて、中米から南米に陸路では行けないはずなのでしつかり調べたほうがいいよ、と忠告した。ふたりは新情報に驚きショックを受けた(グアテマラはふたりの旅の最初の国だったのだ)。

しばらく三人が気まずく沈黙していると、一人の男が近づいてきて、カップルに何かを話しかけた。この男の名前はホセというバルセロナ出身のスペイン人で、ファンジと同じようにバックパッカーだった。ホセも南米に向かうつもりだが、居心地の良さと物価の安さに目眩を起こして、もう二ヶ月近くアンティグアにいるらしかった。そこで何人かの女とセックスをした話を自慢げに話していた。

ホセは自分の友人だというファンと名乗るグアテマラ人呼び出し、いまやテーブルは五人になった。ファンジはいつまでもワインをちびちび飲みながら、スペイン語で盛り上がる彼らの話をほとんど聞き流した。

その後、ファンジはペルー・リマに飛び、二ヶ月かけてリマのほか、クスコやマチュピチュを見て回った。そしてボリビアへ渡り、チチカカ湖、ウユニ塩湖などに行った。ファンジはずっと一人で、たまに同じホステルに泊まるバックパッカーたちと会話をしたが、たいした盛り上がりも出来事もなく、親しくなった人もなかった。わたしが疑問に思ったのは、彼はどうして同郷の旅行者と交流を持たなかったのか? ということだった。彼はほとんど何ヶ月もまともにしゃべることから遠ざかっていた。自分の故郷にいればするだろう会話の十分の一もしなかったと言っている。人生が十分の一になってしまったように感じなかったか?

ボリビアのあと、ファンジはアルゼンチン北部に入り、すぐにパラグアイのアスンシオンに行き、そこで数日を過ごしたあと、バスで二十四時間ほどかけブラジルのサンパウロへ、そしてサンパウロを経由して、彼がすべてを失ったリオデジャネイロに着いたのだった。

ファンジはコパカバーナのビーチを歩いて回ったが、その後、おそらくスマートフォン、クレジットカード、パスポート、かけていたメガネまでも盗まれてしまったようである。すでに閉店してしまったそうだが、とある日本料理屋の前で彼が身ぐるみを剥がされるところを目撃したという証言が、何人もの地元民から寄せられている。しかし、その直後、彼の足取りは途絶えてしまった。ファンジがリオに到着した翌月には、COVID-19の世界的に流行により、ほとんどなくなってリオも

ロックダウンされた。混乱のなか、外国人であるファンジがどこでどうしたのか、誰もわからないし、彼に関心を寄せる人もいなかった。ただ、これがファンジのことなのかわからないが、このところ地元民のあいだでは、アジア系の妙な男が定期的に現れるというのが、話題になっている。その男は、髪の毛もボサボサで全身が真っ黒に焼けひどく汚れ、ビーチでわけのわからない言葉を叫んでいる、という目撃談もあれば、身なりはしつかりとし、高そうなメガネをかけ、しかし、まるで翻訳機を使ったような妙なポルトガル語で高級料理をオーダーするという噂もあり、いずれにしろ男は最終的にそのへんの犬を蹴飛ばし、唾をひっかけ飼い主とトラブルになっているのだという。

小川麻衣（おがわまい1999. 8）

山形県酒田市生まれ。十九歳のときに沖縄・石垣島に移住し、同じく移住者の夫と二歳の息子がいる。スキューバダイビングのインストラクターとして、石垣市内の「マリーン・パラダイス」で働いている。毎朝、天気と風、波の高さや潮の流れを調べ、六時半には「マリーン・パラダイス」に出社し、機材を入念にチェックし、七時過ぎに客を迎えに車を運転する。一回目のダイビングが終わると、夫が港に息子を連れてきているので、息子を預かり、夫が交代して2回目のダイビングのインストラクターとなる。店に戻り、事務作業や洗濯などを少ししたのち、息子と帰宅する。

人と接することが好きで、高校生のときはマクドナルドでアルバイトをしていた。仕事が終わると、友人と自転車に乗り回し、いつまでも笑っていた。山と田んぼが広がり、太陽が沈んでも笑いが止まらず、きつと将来笑いすぎて死ぬはずだと友人と約束した。しかしその友人とはすでに連絡は取らなくなった。風の噂で彼女は（名前もすぐには思い出せなくなっていた）、青年海外協力隊の隊員として南米ペルーにいるらしい。

高校の卒業旅行で訪れた石垣島の海に感動し、移住することに決め、数ヶ月後には石垣島に引越した。庄内空港から東京の羽田空港を経由し、いったん那覇に入った。一週間ほど那覇のゲストハウスに滞在する予定だったが、初めての那覇は彼女にとって、都会すぎて好きになれず、ゲストハウスの雰囲気にも怯えた。彼女が那覇に到着したときは、憧れの沖縄に来た気の昂りから気づかなかったが、翌朝ゲストハウスのロビーに行くとき入口付近の床にうつ伏せて寝ている人や、早くもお酒を飲みながらタバコを吸う人たち、歯がない外国人などがいた。玄関にはカラフルなサンダルが不規則に脱ぎ捨てられており、

自分の靴を見つけるのにも時間がかかった。戦跡や琉球の歴史にも興味は持てず、きれいな海のことだけが頼りだった。それに、アメリカの戦闘機の音がうるさかった。一週間も立たないうちにチェックアウトをし、石垣に飛んだ。

そして石垣でダイビングを始め、「マリーン・パラダイス」でライセンスを取って、そのままアルバイトとして働き、数年前に正社員になった。いつか独立して、自分たちの店を開きたいねと夫と話している。

おがわしんじ
小川信吾（1989. 4）

神奈川生まれ。マイの夫。

2011年の東日本大震災と福島原発事故のあと、石垣島に移住してきた。「マリーン・パラダイス」では社長の宮良に次いで最古参となった。

シンゴは宮良が嫌いだ。給料の支払いや機材のメンテナンス費用、予約のオーバブックイング、挙げればキリがないくらい無限にいいかげんな仕事をするところが嫌いだ。そのくせ宮良は悪びれないのである。ウェブサイトの更新をシンゴに押し付けるくせに、細かい要求をしてくるところが嫌いだ。ことあるごとにシンゴが神奈川県出身であることを引き合いに出し、自分とは違うからと、意見の対立を出自のせいにするところが嫌いだ。機嫌を悪くすると、しばらく口も聞かなくなるところが嫌いだ。酒を飲むと浅はかな理想論を語り、お前のことを信用しているなどと言ってきて涙ぐむところが嫌いだ。

シンゴは観光客の男が嫌いだ。不自然に日焼けしたやつらはいたいタメ口をきいてくるから嫌いだ。たいてい連中は脱毛して日焼けしているくせに、片時もサングラスを手放さない。馴れ馴れしく、何の魚が見れるのかと聞いてくる客が嫌いだ。しばらくダイビングから遠ざかっている白紙のくせに、全部わかっているから説明は省いていいよと言ってくる客が嫌いだ。耳抜きができなくてテンパる客が嫌いだ。自分よりもゆっくりと酸素を失う女が嫌いだ。島はいよいよね、などと都会から来ているというだけのマウントをしてくる客が嫌いだ。神奈川出身と言うと、なんて移住したのか聞いてくる客が嫌いだ。東京の客が嫌いだ。自分も移住しようかなと簡単に言っていて笑う客が嫌いだ。こっちは星がきれいですね、などと普段は空も見上げないくせに急に感傷的になる客が嫌いだ。体毛の濃い客が嫌いだ。たいしてかわいくもない女とボートの上でいちやいや、隠れてキスをするやつらが嫌いだ。ビキニが胸のサイズに合っていない

いせいでむやみにエロい女がたまにいる。関西の男のしゃべり方が嫌いだ。馬鹿笑いする女が嫌いだ。子連れのやつらが嫌いだ。子どもはうるさいから嫌いだ。マイを舐め回すように見るやつらが許せない。マイとの年齢差をいじってくるやつらを殺したい。島の人間じゃないとわかるとがっかりしたような顔をする客が嫌いだ。石垣と宮古と沖縄本島を一緒にするやつらが嫌いだ。本島より石垣のほうがいいよね、などと言うやつも嫌いだ。仕事終わりにしつこく誘ってくるから、客のオバサンと一緒に飲みに行ったら、急に石垣の歴史を語り出した拳句、こつちが何も知らないことにため息をつき、その土地に住むなら歴史くらい知らないといけない、などと酔った勢いで説教を始めてきやがった。

シンゴは外国人が嫌いだ。英語がわからないから嫌いだ。ポートの上でビールを飲もうとするアメリカ人が嫌いだ。アメリカ人だと思ったらヨーロッパから来たとかいうやつらが嫌いだ。中国人はコロナを撒き散らしやがったから嫌いだ。元から嫌いだ。韓国人も嫌いだ。下手な日本語で、「あなたからは差別を感じます」などと言ってきやがった。差別される側に問題がないと思ってるところに傲慢さを感じる。嫌なら日本に来るな。こつちだって差別されている。近頃は男だからといって、風当たりが強すぎる。マイノリティが幅をきかせすぎている。マイノリティぶっているやつらは実は豚だ。マイノリティの味方をするやつらはみんな偽善だ。左翼が嫌いだ。政治の話をするな。俺はなんにも言わない。台風はもちろんだ嫌いだ。太陽がじりじりするの嫌いだ。俺の息子が泣いていても、かわいくてしかたがない。どんなにクソが臭くてもかまわない。この子は自分の分身だ。それ以上だ。自分のうんこは触りたくもないが、この子のうんこは大丈夫だ。掃除と排水溝のゴミを捨てるのが嫌すぎる。

新垣光 (1985. 8)

那覇生まれ育ち。自分を某首相の子どもだと思込んでいる。

ある日急に体調が悪くなり、吐き気とめまいが時計の針が進むごとにひどくなり、下腹部から妖怪が飛び出てきそうな気配すら感じ、気絶した。そのとき見たのは、砂で集めた家にひとり座っていて、急に台風がやってきたかと思うと、雨風で屋根の部分の砂が落ちてきてヒカルを生き埋めにし、まったく身動きがとれなくなって、徐々に地下に沈んでしまう、という夢だった。それから聖書を読まないといけな
いという思いに取り憑かれ、ほとんど夢遊病者のようにふらふらと近

所の教会に行った。どこまでが夢で、いつからが現実なのか、ヒカルにはわからなかった。ただただ、自分は殺されるかもしれないとか、いや本当はもう死んでいるのだとか、あるいは目に見えているものはすべて嘘なのだ、などと感じていたが、教会関係者に揺すり起こされると、すべての迷いが晴れ、この世は素晴らしいと感じた。そして自分は、沖繩の教会ではなく東京にある首相公邸に行かないといけないと強く思った。わたしにはその資格があるのだ、と確信した。

でもなぜ？ あの男のことは好きではない、いや、むしろ嫌いなほうだ。滑舌の悪いしゃべり方、いやらしい笑い方、態度、浅はかな準備に基づく発言、演説、アメリカのバカらしい大統領におべっかを使うあの感じ、彼のどこにも好きどころはないが、それでもわたしは彼から生まれたのだ、彼の股なのか脇なのかあるいは口からなのかそのあたりはさだかではないが、文字通りわたしは彼から生まれたのだ、と思った。

すぐにでもあの首相に会いに行かないといけない、とヒカルは考えた。オリンピックが延期となったと聞いたとき、まさきに思い浮かべたのは彼の顔と心情だった。いい気味だと思った。ただでさえ苦しい生活が曇り、いまにも大雨が降ってすべてが流されてしまいたいようなときに、東京の盛り上がり熱中できるわけがなかった。ヒカルは那覇の土産店で働いていたが、しばらく出勤もできていなかったし、たとえ店に出ても、暑い中でマスクをしなくてはいけないことに耐えられないと思っていた。ヒカルは少し閉所恐怖症気味なところがあり、といっても飛行機の空間とか窓を閉じた室内のような特定の空間よりも、たとえば汗をかいて濡れたTシャツを脱ごうとして、顔のところでひっかかり視界が消えてしまうというような状況に恐怖を感じるのだった。だから太陽の下でマスクをすることは同じようにヒカルを怖がらせ混乱させ、苦痛の記憶を蘇らせてしまいたいことだった。ヒカルは子どものとき、親に打たれ蹴られた挙句、スーツケースにしばらく閉じ込められるという体験をしたことがあった。親の名誉のために、とヒカルは言う。それは日常的なことではなく、たった一回、しかもヒカルが父親の大事にしていたウイスキーのボトルを割ってしまったからなのだ。そのウイスキーのボトルはどんな角度から見ても光り輝いていてきれいだった。そして家族が寝たあとに、父親がそれを人差し指のいやらしい動きで愛撫していることを知っており、だからわざと落として割ってやった。あれがヒカルのいまの恐怖につながっているのかもしれない。閉じ込められることは、ガラスが壊れることであり、光り輝き美しくもあり、そしていやらしいことで

もあつた。

ヒカルが自分は首相の子どもであると確信してからすぐに、首相は首相であることをやめてしまったが、それでもわたしは彼の子どもである、あるいは生まれ変わりなのかもしれない、という気持ちは日に日に強くなっていった。ヒカルとあの男を繋ぐものはいったいなんだろうか。波の上ビーチで夜、あいみよんの「裸の心」を聞きながら、海の上にかかる高架の道路を走る車の光に目を細めていると、不思議とそのことをヒカルは疑問には思わなかった。

それから一年半以上が経過し、仕事を取り戻し、多少の生活の余裕も出てきたころ、マツチングサイトに知り合ったタケシという男に会いに大阪行きの飛行機に乗った。ちょうどそのタイミングで、元首相が隣の県にやってくると聞いて、いまこそ会いに行こうと思つたのだ。だが、彼は別の子どもに銃で撃たれたので、けっきょく会うことは叶わなかった。まあ仕方ないことだとヒカルは考えた。

宮里亜希子（1972. 2）

沖繩返還の三ヶ月前に沖繩、宜野座に生まれた。実家が建設業だったため、十年ほど前に社長に就任したが、現在は経営含むほとんどの業務を夫に任せ、趣味の旅行を楽しみ、いつしか郷土研究家を名乗るようになった。

アキコの「研究」は以下の通りである。

- ・土地をできるだけ隅々まで、路地はもちろん、立ち入り禁止エリアや山などであっても歩ける限りは歩き通し、その風景を写真に撮る。
- ・目に入った人間には極力話しかけ、その人が知る家や地域の歴史を語ってもらい、レコーダーに録る（したがって観光客には興味が無い）。
- ・気の良さそうな、断らなそうな人の家に上がり込み、食事をいただく。そして酒を楽しく飲ませる。そうすることで、普段では皆が口を閉ざしてしまうような、地域の秘密を聞き出すことが可能（※なお、アキコは夜はそこまで食べないので、相手側の負担は重くないと考えている）。

人は見せたいものを見せたい存在である。そして見せたくないものはできるだけ隠しておこうとするものである。この件に関してのプロであるアキコは、隠されたものが冷暗所で腐りかけた結果、放ち始める匂いを敏感に嗅ぎ分ける。観光地の色鮮やかな職に用はなく、その職が汚れ朽ち果て捨てられる瞬間に用がある。人の話にはできれば知性を感じたい。知性とは、頭の回転や話の広さではない。いまの出来事、現実にとこまで真剣に向き合い、そして周りが見えているかであ

る。そういう人たちとの会話は楽しいし、収穫も多い。だが大半は近視的、刹那的で上から目線の快樂主義的な話ばかりである。だからこそ、無数の無為な時間を過ごし、そのわずかな隙間から宝物を見つけることに、アキコは無常の快感を見つけたのだ。

人々が隠そうとするその宝物を見つけたとき、アキコは普段飲まない酒を飲む。アキコは飲める口であるが、飲み始めると深酒になってしまうので、よほど気分がいいときくらいしか飲まない。だが、相手によっては、悪い酒も飲んでしまう。つまりアキコは酒が好きで、毎晩飲んでいる。場合によっては相手のローカルトークを黙らせ、いつまでも自分の旅の語りを肴に、土地の酒を飲んで舌鼓を打つ。先日は石垣島、竹富島、小浜島に行つて散歩をし、本屋に行き、ダイビングをして楽しんだらしい。島はそのまま観光地になりやすいが、他方都会の影響が限定的で、独自の文化が育ちやすいともアキコは考えている。最近、長崎の対馬によく通っている。

昨今の移動にかかる経費の高騰には困り果てている。観光客が戻ってきたせいでホテル代はいつかの倍になっている。だが、移動もできなかったあの時代に戻りたくはない、絶対に。自由に使えるお金はそこまで多くはないが、旅を止めるわけにはいかない。もう家には数週間帰っていないが、夫からは心配する連絡も来ない。

もりたけし
森多計志 (1995. 1)

長崎県対馬市生まれ。長崎市内の大学を卒業後、市内で就職したが、本社に転勤となり、2022年の正月に大阪に引っ越してきた。大阪には以前から頻繁に出張に来ていたこともあり、地下鉄の乗り換えは苦にならないし、大阪は若い人たちが多い。立ち飲み屋も多いし、物価も安い気がする。そんな大都会の生活に満足している。

数年前に知り合ったラウラという日系ブラジル人と付き合っている。ラウラは日本語が壊滅的にひどいが、きれいな目をしていて、長い黒髪も美しく、タケシの好みだった。ラウラは奈良で働いているので、大阪に出張に来たときは連絡をとって、年に一、二回会っていた。そして、転勤を機に会う機会が増え、ほとんどカタコトの日本語とカタコトの英語、そして翻訳アプリを介しての会話にもかかわらず、熱心に口説いた成果が出て、晴れて付き合うことになった。いまは毎週末奈良に通いつめている。ラウラが住んでいるのは工場の寮のため、いつも二人はインターチェンジ近くのラブホテルに泊まる。ブラジルにはラブホテルはないだろうと考えて、付き合ってから最初のドライブデートも終盤に差し掛かったころ、この近くにおもしろいところ

があるから行ってみませんか？とスマホの画面にポルトガル語で表示し連れていったが、ブラジルにもラブホはあるのだという。ブラジルなんて治安が悪そうだから、どんな危険なラブホテルなんだろう、などと考えていたら、助手席に座っていたラウラは顔を真っ赤にして黙ってしまった。その日そのままふたりは結ばれたが、ラウラは終始無言で恥ずかしそうにしている、ブラジル人だから情熱的な交わりを期待していたのに、とタケシは思った。回を重ねてもラウラの反応は良くならないので、近頃タケシは少し面倒に思い始めている。というのも、タケシは自分から動くよりも、自分の体を自由に使われるのが好きという性癖の持ち主である。いつかたくさんの女性たちに囲まれ、いじめられたいという情熱を持ちながら、タケシは大阪市生野区にあるワンルームの鉄骨アパートに暮らしている。

坂本千紘（1993. 2）

対馬生まれ。タケシの姉。かつては東京で演劇の照明家として活動していたが、現在は福岡市内に移住し、夫と娘と暮らしている。いまの生活に不満はないが、唯一気が重いのは、島にいる父親のマサシのことである。

マサシが二十一歳のとき、チヒロは生まれた。マサシはまだまだ現役の漁師である。チヒロが高校を卒業するまで、マサシ、チヒロ、タケシの三人暮らしだった。家は高い山々に囲まれ入江になっている漁師村にあり、日中でもあまり太陽の光が当たらず、いつでも寒かった記憶がある。なお、マサシは信じられないことに漁師であるにも関わらず魚介が食べられない。よく三人でクレープ屋にハンバーグクレープとハッシュドポテトを食べに行った。その店では、甘いベルギーワッフルも姉弟のお気に入りだった。

母親は遠い昔、幼いふたりを残して島を出ていった。というのも、チヒロの父親であるマサシは病的に女にもてたからだ。チヒロの高校の担任の教師とも関係を持っていたし、ほかにも子どもが寝たあと深夜にこっそりと起きて、近所の団地に住む在日韓国人の未亡人の家に通っていたのをチヒロもタケシも知っている。それどころか集落に住む人は皆マサシの情事を事細かに知っていた。そのせいで母親はいなくなり、学校で陰口を叩かれいじめにも遭った。マサシは休みの日、チヒロとタケシを車に乗せ、北の展望台まで連れていった。海の向こうに時折見える韓国、釜山の街影を見ながら、マサシは自分が恋多き男であること、そして自分の底なしの体力のことなどを明け透けに子どもたちに語った。マサシはどんな夜遅くまで情事に励んだとしても、

仕事をさぼることはなかった。だからチヒロはマサシを恨んではいなかったし、マサシの恋の話を聞くこともむしろ嫌いではなかった。

そんなマサシのところに、つまりチヒロの実家に、最近妙な女が居着いているということだ。女は全国を旅しているという自称研究者だそうだがいったい何の研究者なのか、マサシから説明を受けてもチヒロは理解ができなかった。マサシとは島の玄関口である厳原^{いづはら}で知り合ったそうだ。知り合いの居酒屋で飲んでいて、そろそろ勘定してスナックに寄って帰ろうかと思っていたところ、その女に声をかけられた。女はマサシと同一年で、沖繩の田舎に住んでいるらしかった。女は、自分たちが体験できなかった日本のバブル経済の話から、九十年代の流行歌のこと、果ては鯨がおいしいのかおいしくないかの議論まで勝手に始めては、とろんとした目でマサシを見てきたのだという。そして泊まることを決めてないというから、家に連れて帰ってきちゃった、と電話口でマサシは笑うのだが、その声に元気はなかった。チヒロが大丈夫かと問いただすも、マサシはヘラヘラと笑って電話を切ってしまった。

胸騒ぎから、チヒロは週末に娘の世話を夫に頼み、博多港から厳原港行きのフェリーに乗り、約五時間半ほどかけて実家に向かった。集落の入口でタクシーを降り、誰にも見られないように帽子を深く被って、実家に続く細い坂道を登った。坂道を登るチヒロの背中には、見飽きてしまった港と内海が広がっていて、停泊するたくさんさんの漁師船の向こう側にある短い防波堤は、チヒロが学生時代に友人たちと甘酸っぱい恋の話をたくさんした場所だった。オレンジ色に輝く太陽が山に隠れてからしばらくすると、チヒロたちの座る防波堤にも闇がやってきてそれぞれの赤くなった顔を隠し、集落の明かりや星月の明かりを手がかりに、お互いの肚のうちを開示したものだ。

家に着くと、二階のかつてチヒロの部屋だったところだけぼんやりと光っていた。チヒロは静かに、鍵のかかかっていないドアを開け、細心の注意を払って二階へ上がった。わずかに開いていたチヒロの部屋のドアの隙間から覗くと、中ではナイトモードに暗くなった明かりの下で、父親のマサシが正座をさせられていた。そしてマサシは、チヒロが初めて見る女に命令され、過去に自分がしてかしてきた女との情事の遍歴をひとつひとつ細かく説明させられているのだ。いつ何時ごろ、場所はどこで、どんな会話を囁き、そして何回行為を行ったか、どんな体勢で、どこを舐め……など聞くに堪えない内容を異常な細部に至るまで、まるで、すべてをその女の目の前に再現させようとするかのように聞き出していた。女はマサシ、いやもはやチヒロには

それは父親ではなく変態的な肉の塊にも思ったが、その肉の塊の前をゆっくりと歩きながら冷静な口調で問い詰めていて、チヒロはその肉の塊と女を照らす明かりの具合が気になった。女の顔がうまく取れていないし、照明が一方方向からしかないとために、肉の塊が妙に平面的に見えるってしまった。などと考えた。

チヒロは東京で照明家として現場にいたことを思い出していた。知ったかぶりの演出家が、演技が上手くいかない俳優にねちっこく、稽古以外の時間の過ごし方を問い詰めていた。チヒロは楽屋で、お茶を飲みながら、演出家は週刊誌の記者みただなと思ひ、早く時間が過ぎることを願っていた。ケータリングの冷めた弁当はずっと気に入らなかった。ほとんど休みなく、朝から夜遅くまで働かされ、いつも黒い服を来て、演出家のわけのわからない要望を聞かされた。

いつのまにかイライラが頂点に達しており、チヒロはその女に飛びかかっていた。その瞬間チヒロの脳裏には、なぜか父と行ったあの展望台からの景色が浮かんだ。まるで鳥のように、見たことがない角度から、青過ぎる海と猛々しい島の緑と、そして遠くに見える幻想的な釜山のビル群を俯瞰する、あまりにも美しい景色だった。

パク・ユジン^{박 유진} (1982. 7)

釜山生まれ。ロッテ・ジャイアンツの熱心なファンでシーズンを通して社稷野球場へ応援に行っている。2019年もいつもと同じように球場で大合唱をしていたところ、エンジェルとかいう変なスペイン人を見かけるようになり、ロッテ・ジャイアンツが開幕から一ヶ月経たずに二回目の五連敗をした試合で、隣の席に座ったことで、話すようになった。

夏になっても一向に上向かないチームに嫌気がさしていた頃、エンジェルが日本の福岡に船で行かないかと誘ってきた。日本には五年前にも行こうと考えていたが、その頃は、国内での対日感情は最悪と言っているものだったし、その年に起こったセウォル号沈没事故の影響で、そもそもそんな旅をする余地はなかった。ジャイアンツは最下位を抜け出す気配もなかったため、七月中旬、ユジンはエンジェルと共に初めて日本に上陸した。

福岡に着いて、ふたりがまず行ったのはソフトバンク・ホークスの本拠地・福岡ドームである。ユジンにとっても、エンジェルにとっても初めてのドーム球場だった。この年のホークスは七月時点で首位を走っており、試合を見ながらジャイアンツとのギャップが悲しいと、ユジンは感じた。エンジェルは福岡ドームでも、社稷と同じように何

のためらいもなく野球を楽しんでいるので、それを見てユジンは苛立った。正直なところ、ジャイアンツが勝てなくなっているのは、この突然現れたエンジェルのせいなんではないかと、ユジンは思っていた。初日はエンジェルと同じゲストハウスに宿泊したが、翌日ユジンはエンジェルに別れを告げ、ひとり長崎に向かうことにした。長崎は歴史的に教会が多く、それを巡りたいとユジンは思っていた。

七月下旬の長崎はまだ梅雨が明けきらず、小雨が降っていた。事前には聞いていたとおり、長崎の街は坂道が多く、迷路のようで、ユジンは自分がどこにいるのかわからなくなった。見晴らしのよい丘から長崎の街が見えた。多くの観光客や高校生のグループが、街の規模を拡大するかのようにひしめき合っていた。ユジンは長崎で一番有名な大浦天主堂へ向かおうと、大汗をかき、雨に濡れたTシャツをさらに肌張り付け、坂道の上り下りを繰り返した。

川沿いの比較的新しい住宅地の前に、何かの旗を掲げた古い家があった。近づいてみると、その家の前にいた、遠目には女子高生と思われた人物は女装した男で、ユジンに向かって手招きをしていた。家の中に入ってみると、数人の女性がいて、話をやめて彼を一瞥し、挨拶をした。ユジンが外国人だとわかると、彼女たちは少し微笑み、何事もなかったかのようにいつものおしゃべりに戻った。例の男も彼らの会話に加わり、ユジンは古い家で一人の時間を過ごすことになった。

古民家内に飾られていた写真は、日本の様々な風景や、韓国、中国、香港、マレーシア、シンガポールなどを写したものだ。なにかの言い訳のように女性のスナップ写真や自撮り写真等もあったが、いずれにしてもユジンの目を引く写真はなかった。無言で立ち去ろうとすると、その男が、「日本に何日いるんですか」「納豆は食べましたか」「明日から大阪に行くんですが、大阪に行ったことはありませんか」などと尋ね、自分はカメラマンでこのような写真を撮っていると云った。それは、浅はかであっても優しさとおープンマインドを示すことができれば、自分が異文化を理解し、尊重する人間であることを示すことができる、と言えるような態度であるとユジンは感じた。男はユジンに、女性たちはマッサージ師、お菓子職人、アクセサリー職人などと言った。歩き疲れたユジンは一瞬、マッサージを頼みたいと思ったが、頼まなかった。

夜、長崎駅近くの魚を食べられる店を物色し入った居酒屋で、靴を脱ぐ座敷に通された。店内は喫煙可で、各テーブルに灰皿が置かれていた。メニューはすべて日本語で、彼がメニューと格闘していると、隣のテーブルにいた三人組のひとりの男性が助けてくれた。

その男性は演劇公演のために東京から訪れた演出家で、他には女性俳優と男性スタッフがいた。しばらくひとりりでビールを飲んでいると、店内が混んできたので、三人組はユジンに同じテーブルで飲もうと誘ってきた。三人とも日本酒をめちやくちや飲んでた。演出家は英語で、ソウルには何度か行ったことがあり、韓国料理がとても好きで、韓国での焼酎のビール割りも知っていると聞いた。また、日韓の国民感情や政治について話し始め、日本人はもっと歴史や言語について勉強する必要があるようなことを言った。他のふたりは英語を理解しているようだったが、会話にはあまり参加しなかった。演出家の声が次第に大きくなり、「隣国に住んでいるながら、英語を使わないと会話ができないのは恥ずかしい」と言っていたので、ユジンは日本語で「はい」と返した。

ユジンは、自分が外国人であるために話がすぐに国の話になり、まるで韓国の代表にされてしまった気がして、居心地が悪かった。

演出家の男は過去の歴史や反省の弁を熱く語り続けたが、ユジンはそれがとても一方通行だと感じた。自らを加害者として描くことで、罪悪感という武器を手に入れ、戦いを挑んでいるかのようだった。しかし、この男が誰と戦っているのか、ユジンは知らなかった。少なくとも、それはユジンではなかったようだが。

一時間ほどして、ユジンはアルコールに弱いと言って帰らなければならなくなった。演出家はユジンに「お金は払わなくていい」と言ったので、勇人は「ありがとうございます」と言って帰った。

旅は一週間もなく終わり、釜山に戻った。この年のジャイアンツは十五年ぶりに最下位に終わるといふ屈辱のシーズンだった。やはり、エンジェルが招いた黒い運命のせいだった。

*
Los Angeles
ホセ・アンヘル・レオン (1987. 8)

バルセロナ生まれ。元消防隊員。父親は大工だったが引退し、母親は語学教師としていまも市内の学校で英語を教えている。母方の祖父はモロッコ人移民だった。両親とラッキーという名前のゴールデンレトリバーと暮らしている。弟のダニエルは結婚していまはアメリカのサンフランシスコに住んでいる。

三十代に入って、ホセ・アンヘルと両親の関係が悪化したのには理由がある。彼がちょうど三十歳の誕生日を迎えた日、つまり八月十七日に、観光客でごった返すバルセロナのランブラス通りに白のワゴン車が突っ込み、次々と人々をはねていった。人々はパニックに陥り、

叫び声を上げながら四方八方に逃げ惑い、路上にはたくさんの方の被害者がぐったりと、あるいはまったく動かずに横たわり、鮮血がにじんだ。ホセ・アンヘルは事件発生から一時間以内には現場に駆けつけ、負傷者の救護にあたった。その日は雲もほとんどなく、夕方になって三十度を下回らなかつた。現場では血や汗、さまざまな種類の糞尿や埃が混ざって太陽の熱で焦げつき、停滞気味の風によって町中に運ばれた。ホセ・アンヘルは、あのテロのことをほとんど話そうとはしない。日本の秋葉原で彼がつぶやいたのは、「臭いがいけないんだ」という、たった一言だけだった。あれから、ホセ・アンヘルは仕事に行かなくなつた。叫び声とも呻き声ともつかない声が自室から聞こえてくるようになり、両親が心配そうに声をかけると、ホセ・アンヘルは部屋の椅子を蹴り上げ、しばらくの沈黙のあと、パソコンのキーボードを乱暴に叩く音だけが延々と響いた。テロの実行犯にはモロッコ人も含まれていた。母親はそのことがホセ・アンヘルを変えさせたのではないかと考えたため、移民は敵ではない、わたしたちの社会の一員だ、とドア越しに話しかけたことがあつた。ホセ・アンヘルは何も答えなかつた。あるとき、父親は引きこもりの息子へのストレスからホセ・アンヘルのドアを蹴破り、殴りかかつた……と告白しているが、息子の母親である妻は、そんなことは起きていないと言う。

それから一年後の八月終わりに、ホセ・アンヘルは友人に会いに行くと言ひ残して、両親の前から姿を消した。彼のパソコンのインターネット閲覧履歴には、ヨーロッパ各地で頻発していた自動車によるテロに関する記事のほか、バルセロナにおけるオーバーツーリズムについての記事、移民と観光客の違いを解説するサイト、とある移住者が住み着いた土地に過剰なまでのリスクを表明しているブログ、2008年に起きた秋葉原通り魔事件のウィキペディアページ、1972年にイスラエルで日本赤軍メンバーが起こしたテルアビブ空港乱射事件のこと、そしてそれこそが、一般人を標的とした無差別自爆テロという、その後のジハードに影響力を持つたと考察する記事などが残されていた。

両親の懸念は翌日すぐに解決されることになる。口数は少なかつたが、ホセ・アンヘルはインドのデリーに来ていて、しばらくは旅行者として世界を見てまわりたい、と電話してきたのだ。危ないところに行く気はないし、そのうち絵ハガキでも送るよと彼は言った。そして本当に、ホセ・アンヘルは行く街々から両親に連絡をしてきた。

彼は、インド・ネパール・タイ・カンボジア・ベトナム・台湾を半年かけて順に回つた。台湾のあと訪れた韓国で初めて見たプロ野球に

はまり、釜山を本拠地とするロッテ・ジャイアンツのファンとなった。ジャイアンツのホーム球場、社稷野球場に頻繁に足を運び、何人かのファンと知り合いにもなった。この年のジャイアンツは開幕当初は七勝七敗と五分で推移したがその後連敗が続き、五月上旬にジャイアンツは最下位に転落した。ホセ・アンヘルにとっては、結果はどうでもいいことだった。けれども、ほかのファンたちに倣って、チームが負けたときには口数を少なくし、そのかわりできるだけたくさんビールを飲むようにした。韓国語はまるでわからなかったが、ホセ・アンヘルはいつもすぐに人と仲良くなれた。

入国から三ヶ月丸々韓国を楽しんだ後、ホセ・アンヘルは船で、福岡から日本に入った。福岡から那覇、那覇から大阪、大阪から広島、そして東京へと回った。日本でホセ・アンヘルはあまり笑顔を見せなかった。那覇で滞在した美栄橋駅近くのゲストハウスでは、一ヶ月管理人のバイトもした。皆からはレオンと呼ばれた。泊まりに来るのは、東京や大阪の若者が大半で、たいていがホセ・アンヘルより五歳から十歳は若かった。みんなが半笑いで話しかけてきて、ホセ・アンヘルがバルセロナ出身と言うと、手を叩いて「メッシ・メッシ」と叫ぶか、少し知識のある者は、サグラダ・ファミリアはいつできるのかと笑いながら聞いてきた。

ある日の夜十一時を回った頃、脱ぎっぱなしのサンダルで埋め尽くされた玄関に、ずぶ濡れの若い女がひとり佇んでいることに気づいて、ホセ・アンヘルは度肝を抜かれた。女は笑いながら、海が見たくて空港から海に直行したこと、海に入ってからタオルを忘れたことに気づいたことを拙い英語で、恥ずかしそうに笑顔で言った。それからというものの、毎日女はホセ・アンヘルを見つけると話しかけてくるようになった。その女、つまりマイというその女のことを覚えているのは、あの夜、マイの長い髪がずぶ濡れて彼女の額や首、胸元に張り付いていた、その顔が頭から離れないからだ。まるで溺死体のようなだった。あの日の匂いは海の匂いにも似ていたのだ、とホセ・アンヘルは思い出して身震いした。数日後、ほとんどの宿泊者が酔って眠ったあと、ホセ・アンヘルは畳のベッドでマイと寝て、翌朝早くチェックアウトして糸満にあるひめゆりの塔と平和祈念公園まで数時間歩き、平和の礎のある丘から美しい海を見て号泣した。

大阪にも広島にも東京にも、たった数日だけ泊まり、ほとんど抜け殻のようだった。そして成田空港からメキシコシテイへ向かうアエロ・メヒコ便に乗った。機内の窓から遠ざかる東京の街を見て、たぶん、日本に来ることはもうないだろうとホセ・アンヘルは思った。